
Sunny Day Love Farm

『ツンデレ少女と農業をやるハメになった！？』

秋穂らら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sunny Day Love Farm 『ツンデレ少女と農業をやるハメになった!？』

【Nコード】

N3534BA

【作者名】

秋穂らら

【あらすじ】

農家の長男でありながら農業が大嫌いな高校生、阿賀野京一は親から立派な畑を預けられたのだが、元々やる気もなくその畑は草ぼうぼうの荒地へと姿を変えてしまう。

この荒地が立派な畑に戻る事は永遠にないだろう、と完全に放置を決め込んでいた京一だったが、そんな彼の目の前に謎の少女が現れる。

彼女はその荒地を指差して、

「この荒地を立派な畑にしてみせる！」
とか言い出すもんだからさあ大変！」

頑張れ京一！ 彼女の野望を食い止めろ！

プロローグ(前書き)

プロローグ

照りつく太陽の下でまじめに農作業するという事に、なかなか慣れない自分がいた。

空に向かって力強く伸びる野菜の芽を見つめながらそう思う。

「まだ半分も行っていないな……」

俺は芽を出したばかりの小さな野菜たちに水やりをやっていた。

これも彼女達の命令なのだが、どうにもこころにも面倒事を押し付けられているような気がしてならない。

空っぽになったジョウ口を地面に置いて、俺はゆっくりと地面の上へと腰をつく。

すぐ近くに水道やら井戸水でもあればまだ楽なのだが、水を汲む手段として残されているのは近くの用水路に行く事だけ。そこまで遠い訳でもないのだが、何度も往復しているといい加減嫌になってくる。

「こらっ、そんなトコでサボってちゃだめでしょ？」

少し離れた所から聞こえる声の方に向かって視線を向ける。

そこではコンビニで買ったサンドイッチを頬張りながら、楽しそうに談笑する少女が三人ほど見える。

「俺にはお前らの方がよっぽどサボってるように見えるんだけどね……」

がっくりと頂垂れながらジョウ口へと手を伸ばし、落ち込む気持ちを抑えて近くの用水路に向かって歩き出した。

「一体どうしてアイツらと農業をやるハメになったんだかなあ……」

事の発端は入学式の日。

あの日あの場所で彼女と会わなければ、こんな事にはなっていない
かっただろう。

農業なんて大嫌い！

入学式当日の朝。

カーテンの隙間から溢れる太陽の光で俺は目を覚ました。

寝起きのダルい体を起こしながら壁に掛けられた時計へと視線を移す。学校へ行く時間までかなり時間はある。しかし、一度起きてしまつとなかなか寝付けない体質なので、時間が余るのを承知で洗面所へと向かった。

その途中、必ず台所の前を通らなくてはいけないのだが、出来る限りそつちの方向は見ないようにするつもりだった。

それでも、やはり思った通りにはいかない。

「……何だ、今日はもう起きたのか」

その言葉の方へと振り向く。

台所のテーブルの前に座り、厳格な態度で新聞を読んでいる父の姿。

俺が台所の前を通りたくない理由はこいつにあった。

職業、農家。日々の時間を楽しむ趣味や特技など持ち合わせておらず、ただただ熱心に農作業へと打ち込む事を生きがいに行っているのが俺の父だった。

そして、そんな父を持つ俺はこの家の跡継ぎという立場にある。

それがどうしても納得いかなかった。

生まれた瞬間から、その家族の元で生を受けた時から、俺の運命は決めつけられていた。

そこに居合わせた誰しもが、俺の事を農家の後継ぎとして、立派な男に育つ事を信じて疑わなかった。

勝手な期待を押し付けられ、自らの人生の行き先を自由に決める事さえ出来ない。

そんな下らない人生はまっぴらだった。俺の人生は俺のものだ。どう生きようが、どうなるうが、それは全て自分で決める事。だからこそ、俺は父と母が入学を勧めていた農業系の高校には入らず、反対を押し切って普通科の高校へと進学した。

今日はその入学式の日。決められたレールから外れた、自分で選ぶ事の出来た未来。制服に袖を通すのが楽しみで仕方がなかった。そんな輝かしき門出の朝に、父と話す事になるのは出来れば避けたい。

しかし、こう話し掛けてしまわれたら無視するわけにもいかないだろう。

「ああ、そうだよ。今日は入学式だからな」

そう返答するのだが、父は不機嫌そうに鼻を鳴らし、新聞へと視線を戻した。

機嫌が悪くなるのなら、わざわざ話し掛けなければいいのに。それにそんな態度を見せられれば、こっちだって嫌な気分になるのは当然の事だ。

この様子じゃ入学式も見には来ないだろう。不機嫌なまま一人で畑仕事にでも向かうに違いない。そいつは大いに結構な事だ。イライラしながら入学式に来れば、他の人の迷惑にもなるだろうしな。俺はそのまま洗面所へと向かい顔を洗った。蛇口から流れ出る冷たい水が、先程の嫌な気分を忘れさせてくれる、そんな気がした。洗面所を出ると父と母がテーブルに座りながら、朝食を食べているようだった。しかし、俺はテーブルに並べられた人数分の朝食を無視して、そのまま部屋へと向かう。

一緒に朝食を取れば何か言われそうで、出来ればそんな事も考え

たくはなかった。

部屋に戻って俺はもう一度ベッドに横たわる。家族と一緒にいると、どうしても憂鬱な方に気分が傾いていく。それはそうだろう、誰一人として俺のやっている事を肯定してくれる人などいないのだから。

「……まだまだ時間あるな」

壁掛け時計を見ながらそう一言。

早く起きてしまったせいで時間は余りに余っている。だからといって、部屋ですつとごろごろしているのも退屈で仕方がない。

「あー、くっそ……!!」

俺はベッドから飛び起きて、綺麗に畳んであった制服へと手を伸ばした。

こうやって家にいれば気分が何処までも落ちて行つて、入学式という晴れの舞台に最悪のテンションで参加する事になってしまいうだ。

着慣れない新しい制服に袖を通して、通学カバンへと手を伸ばす。もう時間が余っているとか、そんなものはお構いなしだった。

俺は早足で玄関へと向かい、靴箱に片付けてあつた靴を履く。

そして『いつてきます』だとか何の言葉もなしに、急いで家から出ていった。

外では雲ひとつない青空が俺の事を迎えてくれたのだが、優れない気分ではそんな晴天にも苛立ちを覚えてしまう。

「はあ……全くもって最悪の門出だよ」

ようやく自分の意思で踏み出せた一歩、それは俺にとって希望に

満ち溢れているものはずだ。しかし、朝っぱらから父のあんな態度を見せられてしまったては、そんな希望を抱く事なんて出来やしない。

「気分を取り直すがてら、とりあえず学校にでも向かうか」

学校に着いても俺以外の新入生なんて、人っ子一人いなさそうな気はするけれど……。

ため息を混じえながら、俺は学校へと続く通学路を進んでいった。その途中でとあるものに目が止まる。

それは家と家の間に挟まれた、見るも無残な荒地だった。そこには埋め尽くすように雑草が生え、新築が並ぶ住宅街には似合わない、不格好で仕方がないものだった。

「そついや、このルートだとここを通る事になっちゃうのか……」

この場所は元々立派な農地だった。少なくとも数年前はここに新築の家なんて並んではいなかったし、どこまでも続きそうな広大な農地が広がっていた。

しかし、町の事業か何かでここ最近、この辺りは新築住居が並ぶ住宅街へと姿を変えた。

それでも、何故だかこの場所だけは何の変化もなく、ずっとこの場にあり続けている。

「いや……違うよな。何の変化もないなんて戯言だ。昔とはまるっきり違うじゃないか」

小さい頃、父と共によくここに遊びに来ていた。

草むしりを手伝いに、立派に実った野菜を収穫しに、秋が終わった頃にはここでキャッチボールをして父と遊んでいた。

そして父は俺が大きくなって、立派な農家の跡継ぎになつてもらう為に、この場所を俺に預けた。ここで野菜を作つて、農家になる為の一通りの知識を付けさせる為に、この土地を俺へと託した。しかし、父の思うようにはならなかった。

いつからだつたらうか、父の意思に反抗し始めたのは。一体いつから、立派な畑はこんな見るも無残な姿へと変わつてしまったのだろうか……。

「……何もかも親父が悪いんだ」

そうだ、全ては父が悪い。要らない期待を押し付けて、それがこつこつ形として結果に現れる。こんな事になるのなら、最初から業者がこの場所も売り渡してしまえばいいのに。

「……はあ、ダメだ。何か朝から余計な事ばかり考えてるぞ、俺」

父と母の顔が見たくないから、わざわざ早く家から出てきたつていうのに……。

こんな事ばかり考えていたら、家にいるのと何も変わらないじゃないか。

俺は大きく深呼吸をして、通学路の方へと視線を移した。

帰りはもつと別の道を通ろう。毎回この場所を通っていたら、いけない事を考えてしまつてテンションがガタ落ちしてしまいそうだな。まあ通学時間も少しばかり延びてしまつたらうけど、それも仕方ないな。

「ねえ、キミ。一体ここで何してる訳？」

その言葉に思考が遮られる。訳の分からない問いかけに、俺は自然と振り向いていた。

「……は？」

そこにいたのは歳が俺と同じ位の、制服を着た少女だった。

真紅に染まったツインテールを風になびかせ、透き通った藍色の瞳でこちらを見つめている。肌は健康的な色合いで、太陽の日差しがその美しさをより一層際立たせていた。

それだけ見れば可愛らしい少女だった。見ただけならば、一目惚れしたっておかしくはないレベルだった。しかし、両腕を組み鋭い視線でこちらを睨みつけているせいかな、そんな気は一切起きてこない。

彼女の様子が随分と威圧的だったので、ついつい俺も竦んでしまっていた。

「だから聞いてるでしょ？ この場所で何をしてるのかわかって」

「な、何だよ。お前。そ、それはこっちの台詞だつづつの」

「はあ？ それが初対面の相手への態度？」

何言ってるんだ、それは全部自分に当てはまる話だろ！ とツッコミを入れてやろうと思ったが、彼女の放つ圧倒的な威圧感に押しされてそんな言葉は口から出てきはしない。

「……うぐっ。な、何もしてねえよ。ただここに突っ立ってただけだ」

「ふうん。何だ……つまんないの」

俺の言葉が理想と違ったのか、彼女は退屈そうに息をついた。

「あたしみたいにさ、この場所に興味があると思ったのに。何だ、意味もなく立ってただけなんだ」

「あ、ああ、そうだよ。何か悪いかよ」

「別に、何も悪くなんてないわ。ただつまんないって思っただけ」

言いながら彼女は草ぼうぼうの荒地の方へと視線を移した。
しばらくの沈黙の後、彼女はゆっくりと口を開く。

「ねえ、キミさ。この場所見てどう思う？」

荒れ果てた土地を見て何を思うかだなんて、なかなか訳の分からない質問をしてくれる。

「……住宅街に似合わない、不格好な場所じゃないか。さつさと埋め立ててここにも新しい家を建てたらいいのに、って心の底から思うね」

「まあそうよね、普通だったらそう思うわよね。あたしもここがどんな場所だったかを知らなかったら、きっと同じ事を思うわ」

こいつは一体何を言っているのだろうか。まるでこの一帯が広大な農地であったのを知っているような、そんな態度で彼女は話をしている。

しかし、それはどうにもおかしな話だった。俺は彼女の顔に一切の覚えがない。

彼女が地元の間で俺と歳が同じくらいなら、小学校や中学校も一緒だという事になる。ならば少なからず学校で会っているはずだし、面識が一切ないなんて事は有り得ない。

だから、彼女がこの場所が農地だった事なんて知っているはずもないのだ。

それでも、その考えに反して彼女は言葉を続けた。

「ここ一帯は立派な畑だったの。食べた瞬間にもう忘れられなくなるくらい美味しい野菜がいっぱい獲れて、そんな野菜が何処までも続いているようなすごい場所だったの」

心臓が締め付けられたような感覚だった。

彼女の言葉の一つ一つが、俺に重くのしかかる。

「きつと、何かの理由で『あの人』はこの場所を手放したんだわ。それから何もかもが変わってしまった。だから許せないの、あの人が大切にしてきたこの場所を……この畑をめちやくちやにした奴が許せない」

俺は彼女の言葉に息を呑んだ。

「あたしはこの場所を昔みたいな立派な畑にしてみせる」

それは信念を感じられる、力強い一言だった。

俺は何も言い返す事は出来ず、彼女の姿を見つめている事しかできない。

「……ともかくよ、キミが地元の間人だっというなら見てなさい。近い内にここは立派な畑になるんだから。その時はしっかりと覚悟しておくのよ」

言いながら彼女は俺の横を通り過ぎ、そのまま何処かに向かって歩いていった。

振り向く事も出来ず、俺はただただ一言呟く。

「覚悟しとけて、一体何を覚悟したらいいんだよ。こんちくしよ
う……」

彼女の一言一言が的確に、俺へと突き刺さっていた。普通だったら彼女の言葉なんて『電波女が何か言っている』程度で終わる話のはずだ。しかし、俺の場合はそうじゃない。

彼女の言う立派な畑を荒地へと変えた人物。その張本人が俺なのだから、彼女の言葉を気にしないなんて事出来る訳がなかった。

「……ダメだ、考えれば考える程……頭の中がこんがらがっていく。俺は大きいため息をつきながら、腕時計を見つめる。

学校に向かうのには丁度良い時間になっていた。

「……考えたって埒があかない。学校……行くか」

春の風が桜の花びらを散らす。

俺はその風に吹かれながら、重い足取りで学校へと向かって歩き始めた。

絶望の門出

俺は人集りの出来た生徒玄関の前で、どうしたらいいのかよく分からずその場に立っていた。

中学の入学式とは全く違う、新入生の数の多さにぼつ然とする他ない。

「おいおい……いくら何でも多すぎやしないか？」

生徒玄関の前に出来た人集り。原因はそのすぐ近くにある大きな張り紙にあるらしい。

自分のクラスが書かれたその張り紙を見ながら、歓声を上げる者や何処か淋しげな表情を浮かべる者。多分、出身校の同じ奴らが騒いでいるに違いない。

人混みをかき分けて、俺はクラスが書かれた大きな紙の前へと何とか辿り着く。

「……一年三組か。一体どんな面子が揃ってるのか楽しみだな」

俺の知り合いのほとんどが違う学校へと進学してしまった。小学校からの悪友もおらず、この学校に友人と言える人物は全くいない。だからこそ楽しみだった。新しい友だちが増える、そう考えただけで気持ちが明るい方へと向かっていく。

俺は急いで新入生が集まる教室へと向かった。どんな出会いが待っているのかと、色々な期待を込めて教室の扉へと手を伸ばした。しかし、最初に瞳に飛び込んできたのは意外な人物だった。何処か見覚えのある女性が不機嫌そうに立っている。

「あれ 何でお前が、ここに……いるんだよ？」

その言葉に彼女は振り向いた。

朝出会った、赤髪ツインテールの女が目の前にいる。相も変わらず威圧的な態度でこちらを睨みつけ、今朝と同じ馴染めなさそうな雰囲気放っていた。

「……あれ、キミは朝の人か。キミこそ何でこの学校にいる訳？」

「な、何でって……俺がこの学校の新入生だからだろ」

俺がそう言うと、彼女は急に俺のすぐ眼前まで近づき、襟元に付けられた校章に手を伸ばした。

「あれ……ホントだ。これうちの高校の校章じゃない」

そう言いながら俺を見上げる彼女の顔が、今にも俺の顔とぶつかってしまいそうだった。

普通だったならそんな状況になってしまえば、恥ずかしさですぐに顔を離すだとか、せめて照れたりしてくれたら可愛らしいのに、そんな態度も見せる事無なく彼女はじつと俺を見つめ続ける。

「……な、何だよ。も、文句でもあるのかよ？」

強気にそう言い返したつもりだった。しかし、あまりにも彼女との距離が近すぎるせいで、恥ずかしさから俺の頬は真っ赤に染まっていた。

それに気が付いたのか、彼女は一步だけ後ろに下がったと思うと

「何？ 風邪でも引いてんの？」

言いながら彼女は、あろうことが俺の額に手を当てた。

「　っ!？」

あまりの恥ずかしさに泡を吹いてしまいそうだった。おまけに最初から俺とこいつの会話はクラスの集中の的へとなっていたのか、教室中の至る所から囁き声が聞こえてくるのが分かる。

『おいおい、入学初日から何やってんだよ、あいつら』

『ていうか女の方が愛くね？　なんであんなヤツと……』

『ええ〜？　何々どうしたの？』

そんな声が聞こえてきたので、俺は咄嗟に彼女との距離を取った。

「お、お前何なんだよ！　は、恥ずかしくねえのかよ!？」

「恥ずかしいっていうか、ただ校章確認しただけだし。それに顔が真っ赤だったから風邪でも引いてるのかな、って思っただけなんだけど」

周りからあれだけ言われたにも関わらず、彼女は何の態度の変化も見せはしなかった。

鋼の精神力を持つているなのか、それとも頭のネジが一本か二本吹き飛んでいるだけなのか、とにもかくにもこんな性格の奴に出会った事なんて生まれてこの方一度もない。

入学初日から、人生の新たな第一歩から、俺はとんでもない地雷を踏みつけたんじゃないだろうか？

「何騒いでんだ〜？　入学式の説明するからお前ら席に付け〜」

振り向くと、メガネを掛けた『如何にも』といった姿の教師が教

室へと入ってくる。

ざわざわと賑わっていた教室の中が、教師の一言でぴたりと静かになった。

生徒のほとんどが自分の席に座っていく中、俺はぼう然とその場に立ち尽くしていた。

(しまった……自分の席が何処だか確認するの忘れた……)

さっきの彼女との会話のせいで、黒板に貼られた席順の紙の事などすっかり目に入らず、何処に座ったら良いかなんてさっぱり分からなかった。

しかし、こういうピンチな時に俺の頭はよく回る。クラスの全員が席に座ったとなれば、誰も座ってない席が自分の席になる。それに気付いた俺は急いで教室の中を見回した。

「……って、あれ？」

扉のすぐ目の前の席、最前列の場所が空いている。

そしてそのすぐ隣の席に座る人物。如何にも嫌そうな表情を浮かべる彼女がそこにいた。

「何だ……キミが阿賀野京一あがのきょういちくんだったんだ……」

現実に絶望した。今すぐにも逃げ帰りたくなった。

何故ならさっきの赤髪ツインテールが俺の隣の席だったのだから

居ても立ってもいられなくなつて

人生で僅か一回しかない高校の入学式。本来なら思い出に残るはずの、俺にとつての数少ない晴れ舞台。俺もそんな一大イベントの主役の一人であつたはずなのに、頭の中には入学式の記憶なんてこれっぽちも残つてはいなかつた。

あつという間に始まつて、気付かない内に終わつてしまつていた我が入学式。

クラスの記念撮影も、学校に入つてから初めてのホームルームも、ホームルームが終わつて一段落ついた後のメルアド交換タイムすらも、何一つ楽しめる事はなく既に下校時間を迎えようとしていた。

全ての原因は隣の席にいる赤髪ツインテール、姫月二葉ひめつきふたばにあつた。ホームルームの自己紹介でその名前を知つたのだが、奴は東京の方からわざわざ引越してこの学校に入学したらしい。

そんな都会育ちの都会っ子が、どうしてあの荒地が立派な畑であつた事を知つていたのか、考えれば考える程、俺の頭はパンク寸前な状態へと陥つてしまう。

入学式の時だつてあいつが気になつて仕方がなくて、全く集中する事なんて出来なかつた。更に追い打ちを掛けるように行われたホームルームでの自己紹介。その内容は先程説明したばかりだが、おかげさまで俺は完全に力尽き、机に突つ伏している限りである。

「……ねえ、キミさ。さっきからずっと何を一人でぶつぶつ言つてる訳？」

俺はその声で俯けていた顔をゆっくりと上げた。

ぼやけた視線の先にいる人物、目を疑いたくなる程に綺麗で可愛らしい少女の姿。しかし、その容姿がいくら天使のように見えたと

しても、俺にとって彼女は悪魔そのものだった。

「ああ……大魔王様の登場かよ」

絶望に打ちひしがれている俺に、更に追い打ちを掛けるように現れた大魔王。そいつは力なくうな垂れる俺を見ながら、大きくため息をついた。

「はあ……？ 遂に頭でもおかしくなった？」

「俺は至って正常だ。今の俺にはお前さんが魔王とか悪魔にしか見えねえよ」

「魔王に悪魔ねえ。知り合って間もない相手に言うセリフかな、それ」

言いながら彼女は不機嫌そうに腕を組む。

「そうやって訳のわからない事を言ってるのはいいけど、今教室に残ってるのキミとあたしだけだから」

「はい？」

俺はその言葉で教室の中を見回すが、確かに彼女の言う通り、教室はもぬけの殻だった。俺と姫月二葉以外の姿は何処にもない。

どうやら俺がノックダウンされている間に、周りの連中は下校してしまっただけらしい。しかし、どうしてこいつだけが教室に残っているのだろうか。

「ま、また俺に何か用があるのか？」

今朝の事だつてある。また何か変な企みでもしているに違いない。そう思って聞いた事だったのだが、案外普通の答えが返ってきて拍子抜けしてしまう。

「別に。独り言呟いてたから、単に眠っていて寝言でも言ってるのかな、って思っただけ」

「……何だ、それだけかよ」

俺はそう言いながら、また力を失ったように机へと突っ伏した。俺がこうなってしまうっているのも、全てはこいつが元凶なのだ。俺の荒地を立派な畑にしてみせるとか言ったり、急に顔を近づけてきて仕舞いには額に手を当ててみたり……。

「はあ……とんでもない第一歩だな」

入学初日からこいつには振り回されてばかりだ。これが毎日続くようなら、正直耐えられる気がしない。それくらい俺は豆腐メンタルな人間なんだ。出来ればそっと眺めているだけにして欲しいのが本音だった。

「さてと、そろそろいい時間かな」

姫月二葉は腕時計を見つめながらそう呟く。

俺もつられて教室の壁に掛けられた時計を見つめるが、時計の針は二時を指していた。

新入生の本日の日程は午前中で終わっているはずなので、こうやって学校に残り続ける必要は何処にもない。

そついや、どうして姫月二葉は教室に残っていたのだろうか。現実から逃避していた俺の事はさておいて、こいつがここに残っている理由なんて思い浮かばない。

「なあ、どうしてこんな時間まで教室に残ってるんだ？ やる事でもあるのか？」

「やる事なんて全然別れないけど。ここで時間を潰してただけ」
言いながら彼女は机に引っ掛けてあった鞆に手を伸ばす。
「入学式って言ったなら、帰る時に部活の勧誘されるでしょ？ それ
が嫌で勧誘活動が終わるまでずっと教室に残っていただけ」

なるほど。確かにこの高校は部活動に非常に熱心だと聞いた事がある。学校の掲示板に各部活のチラシが埋め尽くされる程に貼ってあったし、普通の時間に帰ろうものなら、各部活の勧誘活動に捕まってしまうだろう。

「……でもさ、嫌なら嫌で断っちゃったらいいだろ？」

まあ高校生活という青春を、部活で謳歌するのも悪くはないとは思うが。

「そうはいかないんだよね。あたしってさ、頼まれたりすると断れない性格なんだ。だから出来るだけ勧誘の人とかには会わないようにしてるの。それ以外にも一応理由はあるんだけどね」

誘われたら断れない性格って……全然そんな風に見えないのは気のせいだろうか？

もう一つの理由というのも気にはなるが、あまり深入りしないのが正解だろう。これ以上こいつと関わるのは御免こうむりたい。

とりあえず、俺もいつまでも教室に残っている訳にも行かない。まだ終わってないゲームもあったし、今日は家に帰ってそれで時間を潰していよう。

俺も鞆に手を伸ばして、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「……んじゃ、俺は先に失礼するからな」

そう言い残して、彼女と視線を合わせないように教室を後にする。そして長い廊下を進み、階段を降り、生徒用玄関まで真っ直ぐに進んでいく。そして下駄箱に手を伸ばしたところで、俺は大きくため息をついた。

「……………どうしてお前も付いて来るんだよ？」

そう言いながら俺は隣にいる人物の方へと視線を向ける。

「……………？ 別に。キミに付いて来たつもりなんて更々ないけど」

姫月二葉は靴を履き替えながら、素っ気もなくそう答えた。

「いや、でも、何かよくよく考えたら朝からずっと一緒に訳だし…」

「それは偶然。朝に会ったのも、クラスが一緒だったのも、こうして帰る時間が同じになったのも、全部たまたまよ」

「……………ふう、なるほど」

意図がなく、ただ自然と振舞っていた結果こうなった。別に俺に對して何か用がある訳でもなく、興味があつた訳でもない。そういう事ならば、今の状況に對して素直に安心する事が出来る。

てつきり彼女に何かしら目を付けられたのかと思つたのだが、どうやらその心配は杞憂だったようだ。彼女は俺を置いてそのまま外へと出ていった。

その後姿を見つめながら、そつと胸を撫で下ろす。

朝から下校の時間まで、何だかんだ言つて結局は一日中彼女に振り回されたような気がする。何故だか彼女と一緒にいると、相手の威圧的な雰囲気の原因なのかひどく疲れてしまう。

「顔はすごく可愛いんだけど……」

鋭い目付きとあの態度さえどうにかすれば、学校中の男子からラブコールが送られるに違いない。実際、姫月二葉が温和で優しい性格であったなら、俺もその一員になっていた事だろう。

「さつとと、家帰るか」

学校も終わった事だし、気持ちを切り替えていこうじゃないか。

色々散々な一日だったかもしれないが、苦難なくして壁は乗り越えられない。この先何があるかと、全部まとめてぶっ飛ばしてしまえばな問題ない。そういう意気込みでやっていかなくては。

玄関から見える桜の木々を見つめながら外へと歩き出す。

学校のすぐ目の前にあるコンビニで軽く買い物をして、俺も帰路へとついた。

そしてしばらく歩いて、俺はある事に気が付いた。

「……げ、こつちって朝通ったルートじゃん」

そういえばそうだった。この道を通れば俺がずっと放置し続けてきたあの畑がある。

畑なんて無視してしまえばいいのだが、ついつい気になってしまっうのは間違いない。

「と言っても……今更道を引き返すのもな」

この道は家から学校までの距離が一番近い。畑さえ通り過ぎてしまえば、後は何も悪い所なんてなく自分の家はすぐそこにある。

仕方ない、今日これっきりだ。明日からは通学路をしっかりと変更して、あの畑を見るのは今日でお終いにしよう。

そう思った俺はそのまま真っ直ぐ歩いていった。

いくら心の準備をしていたとしても、畑が近づくとつれて憂鬱な

気分へとなっていく。

出来る限り見ないように、出来れば完全に無視すれば良かったのに

「相変わらず、殺伐としてるよな。ここ」

結局は雑草が生い茂った畑の前で、俺は立ち止まっていた。

未練でもあるのか、俺。いや……そんなものはないはずだ。心に決めたのだ、農家なんてやらないのだと、父の跡なんて継ぐつもりはないんだって

「……って、あれ？ 誰か……いる？」

目が止まった。ぼうぼうと生えた草の合間に、人の姿があった。

藍色に染まった体操着を着て、せっせと草むしりをしているように見える。

何処かその姿に見覚えがあった。赤い髪のツインテールを揺らしながら、一生懸命に背の高い草を抜き取るうとするその姿

「…… 姫月二葉？」

間違いない、彼女だった。

新品であるはずの体操着は所々が汚れて、真っ白で艶やかな肌にも泥が付いていた。それでも額に汗を浮かばせながら、彼女は必死に雑草を抜こうとしている。

「朝のあれは本気だったっていうのかよ……」

雑草が生い茂った無残な荒地を、元の立派な畑にしてみせるといって彼女の言葉。

確かにあの力強い言葉からは、信念のようなものが感じ取れていた。

それでもたった一人で、あんな華奢な体だけで、埋め尽くすように生えた雑草をどうにかするだなんて事出来る訳がない。そんな訳がないのに

いくら俺がそう思っても、彼女は覚束ない動きで草を抜き続ける。

そんな彼女を俺はじっと見つめていた。

俺には関係ない、あんな荒地がどうなるうとも知った事じゃない。そつだ、馬鹿馬鹿しい話なんだ。あんな動きじゃ半年経っても終わるはずがない。

今日だって思ったじゃないか。これ以上あいつには関わらないようにするのが、俺にとっての正しい選択なんだと

「……きゃあっ！」

草の向こうから彼女の声が聞こえた。その声から察するに、きっと何かに足を躓かせたのだろう。しかし、彼女は痛がる様子すら見せずに立ち上がり、また地面から伸びる雑草へと手を伸ばす。

「ああ……もう、ちくしょう！！」

気付けば俺は畑の方へと向かって駆け出していた。

生い茂る雑草を掻き分けて、俺は姫月二葉のすぐ隣で立ち止まる。

「え……？ キミ、何で？」

彼女は草を握り締めながら、啞然とした顔で俺の事を見つめていた。

「……俺がやる。俺が草取り代わるから、お前は少し休んでろ」

俺はそう言ってすぐにしゃがみ込み、目の前にある雑草へと手を伸ばす。

「ど、どうしたの？ あたしの代わりに草取りやるって」

「そのまんまの意味だよ。見てられないんだ、そんなやり方じゃない

つまで経っても終わりはしないつつつの」

俺は姫月二葉が抜いたはずの雑草へと視線を移した。

思った通りめちゃくちゃな抜き方だった。抜いたと言うよりも、中途半端な所からちぎれてしまっていると言った方が正しいかもしれない。

多分草の握る場所を間違えていたのだろう。根っこに近い部分を掴んで引っ張ればいいのを、わざわざ先端の葉の方を掴んでいたようだ。

小さい草ならまだいいが、背の高い草はちぎれているものばかりで、しっかりと草を抜いていると言いがたい。

「雑草は生命力が強いから、こんな中途半端なやり方じゃすぐに元通りになっちまう。抜く時はちゃんと根っこからじゃないとダメなんだ」

俺はそう言いながら手際よく草を抜いていく。

「すごい、そうやってやるんだ……」

農作業を全く知らない都会っ子から見れば、きつと草取りの当たり前な動作だつて素晴らしく思えてしまうのかもしれない。そんな何も知らない奴が、いきなり立派な畑を作るだなんて無茶にも程がある話だ。

「……ふう、結構抜いたな」

と言っても、まだ半分以上残っている雑草を見てみると目眩がしてくる。いくら俺でも残りの時間でこの全てをとれる気はしない。

居ても立ってもいられなくて、何も考えないで手伝ってしまったが……。冷静になって考えてみれば、こんな事をやったって俺には

何の得もない。

手本は見せた。やり方さえ分かれば、きっと姫月二葉も上手くやってくれるだろう。後は適当に理由を付けて帰ってしまえば、何の問題も

「イチ、キミって農業とかやった事あるの!？」

「イチ……?」

何とも聞き慣れない言葉だった。俺はその言葉の意味を聞き返そうと、彼女の方に振り向くと……姫月二葉が宝石の様に目をキラキラと輝かせている。

「その『イチ』っていうのは、一体何の事なんだ？」

「キミの名前って京一でしょ。だからイチ。良いあだ名だと思わない?」

イチなんてあだ名で呼ばれるなんて今まで一度もなかった事だ。

良いあだ名、なんて言われたって正直な所全然しっくりこない。

「それにしたって……まさかあたしの手伝いをしてくれる人がいるなんて思ってもいなかったよ。ずっと一人でやるうって、誰の手助けもいらないうって思ってたのに」

「……一人でやるうって、そんなもん無理に決まってるだろ」

やっぱり思った通り、随分と無謀な事を考えていたようだ。

これで分かっただろう。言うだけなら簡単なんだって、こんな荒地を元に戻すだなんて到底無理だと納得しているに違いない。しかし、どうにも様子がおかしかった。今までの様子と全く異なっていた。

姫月二葉が放っていたあの威圧的な雰囲気も、俺に向けられていた鋭い視線も、今の彼女からは全く感じられず、むしろ羨望の眼差しを俺へと向ける。

「うん、一人じゃダメだっていうのはよく分かった。だから、明日もよろしくね」

「……は？」

何言ってるんだ、こいつ。って……おい、もしかして

「だから、明日も一緒に草むしりしようね」

そう言いながら彼女は愛嬌いっぱい笑顔で俺へと振りまく。

しかし、その言葉も、その笑顔も、農業から離れた俺にとって悪魔の囁きのように感じ取れてしまっていた。

「おいおい、ちょっと待て。何で明日も俺が参加する事になってるんだよ」

「だって、あたし農作業とか全然やった事ないし……。それに比べてイチはすごく手際がいいんだもん。経験者？　って思っちゃうくらい」

「いや、だって俺は……そもそもこの土地の」

この土地の所有者で、家が農業やってるし。そう言おうとした瞬間に、俺は右手で自らの口を塞いだ。

(……よく考えてみるよ、俺)

姫月二葉はこの畑をめちゃくちゃにした奴の事を許せない、って言ったんだ。もし俺がこの土地の所有者で、荒地にした張本人であると知ったら一体何をされるのか全く予想が付かない。それに俺の

家が農業をやってるって知られただけでも、色々と面倒な事になってしまふのは目に見えている。

地面に飛び出たあからさまな地雷を、わざわざ両足で踏みぬくなんて危険な事まず出来る訳がない。ここは冷静に、適当な事を言うてごまかすのが妥当だ。

「この土地のちょっと近くに家があるから、見て覚えたただけの話で、農業の経験なんて全然ないからなあ、あははは……」

必死に作り笑顔を浮かべるが、どうやら成功したらしかった。

姫月二葉は俺の言葉に何の疑問も浮かべていないようで、なるほどといった感じで首を縦に振っている。

「でも、あたしなんかより断然すごいよ。見ただけで覚えられるだなんて、あたしには絶対無理だもん」

ああ、無理だろう。俺だって無理だ。見ただけで農作業を覚えられるだなんて、絶対記憶能力の持ち主だとかそういう超人くらいにしか出来ない芸当だ。

まあ、姫月二葉の話がどうあれ、まさか草むしり程度でここまで喜んでもらえるとは想定外だ。適当に見本になる程度で終わりにするとか、それくらいで良かったのに……まさか、明日も手伝えと言われるなんて……。

(こ、断り辛い……！)

もうなんて言うか、彼女の視線が痛かった。彼女が俺に向ける羨望の眼差しが俺の心へと突き刺さる。

仮に俺が断ったとしても、こいつは明日も今日のように一人で草取りをしているだろう。それで今日みたいに何かに足を躓いて……

へタをすればケガをしてしまう事だっと思って考えられる。

それに、本来ならば俺がやらなくてはいけない畑の管理を、別の女の子にやらせるだなんて事を父が知ったら一体何をされるか分かったものじゃない……。姫月二葉の方も放っておいたら何をしてくすか分からないし、いつその事俺がこいつを監視して、やってる最中に適当な理由を付けて作業を止めさせたらいい。

「……はあ。じゃあ、とりあえず明日もな」

ため息混じりに俺がそう答えると、彼女は満面の笑みを浮かべながら信じられない事を言った。

「うん！　じゃあ明日の朝六時に集合だから遅れないようにね」

もはやこいつが何を言っているのか分からない。

「朝の六時ってお前……本気でそれ言ってるのか？」

「本気も本気よ。春休みとか夏休みだったら時間にも余裕があるけど、明日からはちゃんと授業もあるし、こつやって草を取ってる時間もあんまりないじゃない」

「いやまあ、今日は入学式って事で一応時間はあったかもしれないけど……。だからと言って明日の朝からまた草取りやるだなんて……」

「部活と一緒に。朝の時間や放課後の時間をもっと有効に使わなくちゃ」

言いたい事は分かる。しかし、学校の気怠い授業よりも、もつと嫌いな農作業を朝からやるだなんて、想像しただけで頭が痛くなってしまう程に最悪なものだ。

彼女は俺のそんな気持ちなんていざしらず、体操着についた泥を手で払ったと思うと、

「それじゃあ、明日もよろしくね。イチ」

草むらの何処かに片付けてあったカバンを拾い上げ、彼女はそのまま駆けて行く。

俺はその様子を見つめながら、大きくため息をついた。

「……おかしい。こんな予定じゃなかったんだが」

姫月二葉の事を監視すると言っても、流石に部活の朝練みたいな事をするだなんて想定外もいいところだ。あいつの連絡先なんて知る由もないので、今更断るだなんて事も出来やしない。

「何も言わないでサボったりしたら、一体何されるかも分かんねえしなあ……」

明日は仕方ないとしてそれ以降はどうするべきなのだろうか？

あいつの性格から考えて、そう易々と諦めてくれるとは思えない。どうにかして上手い事を言って、この荒地を立派な畑にするなんて事止めさせなくてはいけない。

まあ、とにかく明日だ。明日にならなくちゃ何も進まないんだ。

とりあえず今は家にあいつを止める為の作戦を考えつつ、この疲れた体を癒そうじゃないか。

ふかふかのベッドと気持ちの良いシャワーを目指して、俺はアスファルトの道路の上をずんずんと進んでいった。

妹登場

太陽は落ち、辺りはもう暗くなっている。

家に帰った直後自室へと駆け込み、俺はそのままベッドの上で横になっていた。

草むしりと言っても久しぶりの農作業だ。体中はもうへとへとで動く体力なんて何処にも残されていない。

「……これじゃあゲームをする気力もねえよ」

目の前にある携帯ゲーム機を見つめながらそう呟く。夜中になったらゲームでもして時間を潰すのが日課であったが、今日に限ってはゲームをする気も起きはしない。

布団の中にうずくまり夕飯まで一眠りしようと思った時だった、俺に休む暇を与える余裕もなく、自室の扉をノックする音が聞こえてくる。

「兄ちゃん、入るよー」

俺の返事を待たないで何の躊躇もなく部屋に入ってくる声の主。背丈は俺の胸元ぐらいしかまでなく、肩まで伸びた茶髪のセミロングを揺らしながら俺の方へと近づく少女の姿。

名前は九乃（この）、こいつは俺の『妹』だった。

妹の容姿を端的に説明すれば『俺の持つ遺伝子配列をどう弄ったってお互いが似通う事はない』と言った感じで、実際周りの評価はそんなところだった。二人で街中を歩いていても、お互いが兄妹だと思われる事はまずない。

俺とは比べ物にならないくらい整った顔付き、兄から見ても素直に可愛らしいと思える容姿だった。

「兄ちゃん、ちょっとこのゲームの事なんだけどいいか？」
妹は片手に持った携帯ゲームの画面を俺へと見せる。

「……妹よ。今こうやって横たわる俺の姿を見てどう思う？」
「んー？ とつても疲れてるから、今の俺には関わるな〜って顔してると思っなあ」

そう言っつて満面の笑みを浮かべる妹。

こいつとは長い付き合いで、言っつても言わなくても俺の考えをよく分かつてくれる。

まさしく彼女の言っつ通り今の俺にはゲームをやっつている気力なんて残されていない。

「まあまあ、兄ちゃんもそんな事言わないでさ。可愛い妹と楽しく遊んでよ」

「自分で自分の事可愛いとか言っつな。ナルシストか、お前は」

「そんなんじゃないよ？ ボクはあくまで謙虚に、客観的な視点で事実を述べてるもので」

「……謙虚とか客観的とか、つい最近までランドセルを担いでいた奴が吐くよっつなセリフじゃないな」

「いやいや〜。昔からよく大人びてるっつて言われるじゃないか」

「大人びてるっつつか何っつつか……お前の場合はもう変人のレベルだよ」

そう、それはもうおかしなぐらいだっつた。

子供とは思えないくらい気が利くし、場の空気だっつてしっつかり読める。子供同士で無邪気に遊んでるよりも、近所の奥さんやら親父の友達と喋っつている時の方が随分とこなれていて、たまに本当に大人なんじゃないか？ と思える程だっつた。

「変人とか兄ちゃんもなかなかヒドい事言つなあ……」

そう言つたと思うと、妹は部屋の中にある着替えの入ったタンスへと指を差す。

「でも、タンスの中にえっちい本を隠してる兄ちゃんには言われたくないものだけど」

口に手を当ててムフフ、と照れ笑いをする我が妹。

「うえっ……!?!」

中学の頃から一度も見つかっていなかったはずの、秘境とも言える工口本の隠し場所。それを言い当てられるなんて思ってもいなかつた事だ。動揺を隠しきれるはずもない。

「兄ちゃんが何処に何を隠しても、そんなの全部お見通しだよっ」

「……ぐっ、何てやつだ」

「ふっふっ。それだけじゃなくて、兄ちゃんまだボクに内緒にしてることあるよね？」

「お……お前にしてる隠し事？」

冷蔵庫に入っていた三個入りのプリンを内緒で独り占めした事か？ いや待て、それは昨日バテて夜中のコンビニまで買いに走らされたはず。

俺の持っている工口本の位置まで把握している様な奴だ。こいつ相手に隠し事なんて出来るはずもないし、プリン以外では最近思い当たるような事もない。

「ふっふん、何だか自分でもよく分かんないって顔してるね。じゃあ仕方ないなあ、ボクがその答えを教えてあげる」

言いながら、ずいっと俺の眼前にまで顔を寄せる妹。

そして彼女のその言葉に耳を疑った。

「……今日の夕方、あの場所で兄ちゃん何してたの？」

心臓がどくん、と飛び跳ねる。

「あの場所で何してたって、もしかしてお前」

「そ、見てたよ。兄ちゃんが知らない女の人と一緒に草むしりしてたトコ」

「う、嘘だろ……？」

「嘘じゃないよ。後ろの方で見てただけど、兄ちゃん草むしりに集中してるばかりで、全然ボクの事に気が付かないんだもん」

妹の言う通りあの時は草を取るばかりに集中していて周りの事なんか目に入らなかった。

ていうかそもそも何でこいつがあの場合にいたんだ？ あんな荒地に用があるなんて思えないし、わざわざ俺を迎えに来るなんて道理もない。

「いや、ボクも入学式が終わっちゃって退屈だったんだ。それで犬の散歩でもしようと思って外を歩いてたら、兄ちゃんの姿を見つけてさ」

妹は言いながらにこやかスマイルを浮かべた。

「つまり……俺がやってた事を全部見てたって訳か……」

俺はがっくりとうな垂れる。俺が農業なんて二度とやらないんだと、そんなものには興味がないんだって、そういう風に聞かせた身内の人間に見られていたなんて

「もしかして、親父達も知ってたりするの？」

一番知られてはいけない人物、自分のやりたいように生きていく中での一番の障害。

もし彼等に知られているような事になっていたら、それはもう最悪だった。

「そんな心配しなくて良いって。パパ達は全然知らないから！」

その言葉に俺はほっと息をつく。

「何だ……ソレなら良かった」

最悪な事態は免れている訳か。しかし、妹に俺が農作業をやっていた事を知られているのも色々とマズい気がする。だって

「でも、もしパパ達が兄ちゃんが農業へのやる気が出たって聞いたら、きつとその日の夕飯はお寿司とかになるかもしれないか。それはそれでいいかもっ」

こんな事を言い出し始めるのだから、結局は時限爆弾を抱え込んでしまった事には変わりはないのだ。全くもって困った事になってしまった。

「……はあ。どうしてこんな事になっちゃったんだか」

全ての始まりは姫月二葉、あいつにある。何とかしてあいつを止めなくてはならない。親父達に気付かれるよりも早く、事を穏便に済ませなくては……。

「ふふっ、色々悩んでるご様子だね。でも、頑張つてよ。兄ちゃんならきつと上手く出来るはずだから」

そう言って妹は俺から離れ、扉の方へと向かって歩いて行く。

「じゃあ、そろそろ夕飯だと思うし、ボクは部屋に戻るね。夕飯になったらちゃんとキッチンにまで来るんだよ？ みんなが食べ終わるまで待つとか、一人で部屋で食べるとか、そういうのは絶対ダメなんだぞっ」

俺は毛布に包まりながら、妹が部屋を出ていくのを黙って見ていた。

きつと上手く出来るといふ彼女の言葉。

それはあの荒地を畑へと戻す事に対して言っているのか、それとも姫月二葉を止める事に対して言っているのか……まあどちらにしろ、あいつの言葉なんて深く考えないに越した事はない。

「とりあえず、一眠りでもするか……」

俺は毛布に包まってゆっくりと瞼を閉じる。

「ご飯が出来たと母親に呼ばれたのは、その数分後の事だった。

朝練ではなく朝農

現在の時刻はまだ父も母も眠っている朝の五時。

「ねみい……ダルい……今すぐ横になつて寝たい」

俺は今一体何をしているんだっけか。ああ、そうそう、昨日の草むしりの続きをやるんだ。その為にわざわざ五時に目覚ましを掛けて、あの荒地に行く支度をしている訳か。

昨日はいつもより多めに睡眠時間を取ったはずなのに、やはり慣れない事すると辛いと言うか、どう足掻いたって眠いものは眠いだ。

大きくあくびをしながら、俺は体を精一杯伸ばす。

とりあえずどれだけ早く起きようが、朝の支度はしっかりしなくては。

俺は扉を開けて部屋の外へと出ようとした。

親父達にバレないように、ゆっくりと音をたてないように扉を開けていく。するとそれと同じタイミングで、向かいの部屋の扉も開いていく。

「おはよ〜……」

眠そうに目をこすりながら、俺の目の前に現れたのは妹だった。

「……何でお前まで起きてるんだよ。今何時なのか分かってんのか？」

妹はあくびをしながら眠そうに俺の質問へと答える。

「だって、兄ちゃんの部屋の目覚ましがうるさいんだもん」

まあ確かに俺の部屋と妹の部屋は向かい同士だが、今まで一緒に暮らしてきて目覚ましは隣にまで響いてきて起きる、なんて事は今までなかったはずだ。

こいつの事だ。何かを嗅ぎつけて、こつやって起きてきたに違いない。

「もう一眠りしたらどうだ。学校行く時間なんてまだ先だし、起きてたって仕方ないだろう？」

「いやいや、兄ちゃんと一緒に一回起きちゃうとなかなか寝付けない体質なもので」

「嘘つけ。いつも家を出るギリギリの時間まで二度寝やら三度寝してるくせに。それにいくら寝付きにくい体質だったとしても、この時間ならすぐに寝れるはずだろ」

ていうか寝て欲しかった。二人でこんな所でガヤガヤやってたら親父達が起きちまう。

俺が朝から畑の草むしりに行くだなんて事をあいつらだけには知られたくはない。

「今は構ってる暇ないから、言われた通り早く寝ろ。早起きは三文の得、ってのは嘘っぱちだからな」

俺はそう言って妹の横を通り抜けるように洗面所の方へと向かうとした。しかし、その動きを阻むように妹は俺の腕を掴む。

「嘘っぱちじゃないよ。今の兄ちゃんにとっては……少なからずね」

じっと妹は俺を見つめていた。その表情には今までの眠そうな雰

困気も、幼稚な子供らしさなど何処にも感じられない。

たまにこいつはこういう大人びた雰囲気を見せる。

本当に同じ血が流れているのかと、疑問に思える程の雰囲気を放つ。

「やれやれ……。とりあえずキッチンの方行くぞ。ここだと親父達が起きちまう」

その言葉で妹は俺の腕から手を離し、キッチンのある方へと体を向ける。

「うん、そうだね。そーしよっか」

俺と妹はキッチンに入り、椅子の上へと腰を付く。

「んで？ 一体どういった要件なんだ？」

「要件っていうかなんて言うか、ボクから兄ちゃんへの僅かながらの協力というか……。うん、とにかくそんな感じ」

「僅かながらの協力って、お前俺が何しようとしてるのか知ってるのか？」

まさか、と思った。普段じゃ考えられない時間に起きている訳だが、だからと言って俺がこれから何をしようとしているのかなんて分かる訳がない。

「ふふん、ボクを誰だと思ってるの？ 兄ちゃんが何を隠してしても全部お見通しだって言ったよね」

そついや昨日の夜そんな事を言っていた。しかし、いくら何でも勘が良すぎるって話だ。相手の考えている事を読む超能力でも持つ

てるんじゃないだろうか。

自信満々な表情を浮かべる妹。

これじゃあ知らないフリをしても無駄なんだろうな……。

「全く……。そうだよ、そう。これから昨日の草むしりの続きをするところだ」

俺がそう言うと妹はニヤリと笑って、

「へ〜、そういう魂胆だったのか〜。全然分かんなかったよ」

「……は？ いや、待て。今お前全然分からなかったって言ったのか？ 俺の隠し事なんて全部お見通しだって、さっきの台詞は「しまった、と思った時には既に遅かった。」

「ふっふ〜。兄ちゃんの隠し事なんて全然分からなかったのが本音だよ」

満面の笑みを浮かべながらそう答える妹。

完全にしてやられた。こいつ俺の事を騙してやがってたのか……。適当な事を言っ、俺から情報を聞き出そうとしてたって訳か。

「……お前、詐欺師の才能とかあるんじゃないの？」

テーブルに向かってがつくりと頂垂れながら俺は大きくため息をつく。

あんな自信満々の表情を見せられたら、誰だって本当の事を答えてしまう。本当に天使みたいな顔して悪魔みたいな奴だ……。

「でもでも、兄ちゃんの協力をしようって思ってるのは本当の事なんだよ？ 普通に聞いたって答えてくれなさそうだったし、ちょっと悪い気はしたけど……」

「それでわざわざこんな方法使って聞き出そうとした訳か。全くお

前は本当に未恐ろしい奴だな」

呆れるとかそういうの飛び越えて、もはや感心するレベルだ。妹だけは敵に回しちゃいけない。心の底からそう思うね。

「で、その協力っていうのはどんな事してくれるんだ？ まさか思いついてないとか、そういうオチはねーよな？」

「大丈夫、今この瞬間に思いついたから」

おいおい、そんなんで本当に大丈夫なのかよ……。

「それじゃあえっと、説明するね。ボクが出来る協力は些細なものかもしれないけど、色々とやりやすくなるのは間違いないと思うんだ」

「色々とやりやすくなる？」

「うん、例えば今日の朝の事もそう。パパ達に見つからないようにいくら兄ちゃんが朝早く家を出たとしても、結局は家にいないんだから『一体あいつは何処に行ったんだ』って思われちゃうでしょ？ それってつまり、パパ達に内緒で兄ちゃんが何かをしている事がバレちゃう訳」

「まあ、そうなるな」

朝から一度も姿を見せずに学校へ行くだなんて難しい話だ。そうなれば親父達も俺が寝坊をしているんだとか、ヘタをすれば家出をしているんじゃないかと思われてしまう。仮にその誤解が解けても朝から何をやってたのか追求されるのは目に見えている話だ。

「それで、そうならないようにボクがパパ達を説得する。そうすれば兄ちゃんが朝早くからいない事だって不思議に思わないだろうしね」

「説得って……一体何を言うつもりなんだ？」

そういえばこいつ、昨日の夜に俺が農作業をやってる事を親父達が知れば寿司が食えるだの何だの言ってたな。まさか正直に話すつもりなんじゃないだろうか？

「そんな怖い顔しないでよ。本当の事なんて絶対言わないから。ボクがパパ達を説得する内容はものすごく単純な事だよ」

「単純な事……」

「そう、それは多分魔法の言葉。聞いた瞬間にパパ達は何も言えなくなると思う」

そう言った後、妹はまた不敵に微笑んだ。

「兄ちゃんが部活を始めました、ただそれを言うだけで良いんだ」

「ぶ、部活……？」

「うん。兄ちゃんは出来ればパパ達とは話したくないだろうし、ボクが仲介に入れば素直にその言葉を伝えられるでしょ？ そうすれば朝早く家を出たって朝練だと思われるし、帰るのが遅くなっても部活が長引いたって思われる。どう？ とっても素敵な言葉だと思わないかな？」

ああ、思う。些細で素敵な協力だ。だけど妹よ、少しだけツッコミたい事がある

「どうしてお前はそんなにスラスラと思いつく事が出来るんだよ……」

腰に両腕を当てて、妹はまた自信に溢れた表情で、

「まあボクは兄ちゃんよりずっと頭が回るからね」

つい最近まで小学生だったような奴が、俺なんかよりもずっと頭

が冴えて、なおかつ俺が置かれている状況に対してここまでの確な協力をしてくれるだなんて……何というか、本当に出来過ぎた妹を持ってしまったもんだな。

「よし、それじゃあそういう手筈で頼むぜ。俺はこれから支度をしてくるからよ」

「おっけー。じゃあボクは部屋に戻ってもう一眠りしてこようかな」
「何だ。あんだだけ眠れないって言ったのに、結局は寝ちまうのかよ」

「そつだよ、さつきからずっと我慢してたんだから。それじゃあおやすみ、兄ちゃん。上手いことやるんだぞ？」

妹は親指を立てながら俺に向かってウィンクをし、キッチンから出ていった。

「……さてと、じゃあ早速支度をして向かいますか」

早いとこ姫月二葉の暴走を止めて、農業からかけ離れた一般的な高校生活を送ろうじゃないか。悪いな、妹よ。お前の言っている部活には早々と退部しちまう事になりそうだぜ。

俺はそのまま洗面所へと向かい顔を洗い歯を磨き、その後部屋に戻って新品の体操着へと手を伸ばす。

昨日は仕方なく制服姿で草むしりをやった訳だが、今日は素直に体操着で参加させてもらう。制服に泥でもついて親父達に見られたら最悪だ。

支度を終えた俺は玄関へと向かい、出来る限り音を立てないように外へと出ていった。

家の外、玄関のすぐ横にいる我が家の飼い犬が俺の姿を見て尻尾を振っているが、今はこいつの相手をしている暇もない。

「ちょっと出かけてくるから、お前は静かにしてるんだぞ？」

人差し指を口に当ててシートと言いながら、俺は学校へと続く道路の方へと駆けていく。

時間も時間なので道路を走る車も、俺以外の人の姿も何処にもない。腕時計で時間を確認すると、まだまだ姫月二葉が言っていた予定時刻の六時までには余裕があるようだ。

別に急ぐこともない。とりあえず、のんびり歩きながらあいつを止める為の手段を考える事にしよう。

そう思っただけで必死に色々考えながら進んでいくのだが、何も思いつかないまま目的地に到着してしまっている自分がいた。

「はあ……妹みたいに俺も頭が冴えたらなあ……」

妹にも一応相談しておけば良かったか。あいつならいくらでも良い手段を思いついてくれただろう。少し失敗したな、と思いながら草ぼうぼうの荒地へと視線を向ける。

「……おかしいな。まだ予定時刻より十五分程早いはずなんだけど」

もう一度時計を確認する。まだ時計の針は六時を示していない。

それなのに雑草まみれの荒地の中で、せつせと草取りをする姫月二葉の姿がそこにあつた。

「あ！イチ、遅いじゃない。何やってたのよ！」

俺の存在に気が付いたのか、手を止めてこちらに振り向く彼女の姿。

遅いじゃない、ってお前が早すぎるんだろ……と心の中で思いながら、俺は姫月二葉の方へと近づいて行く。

「……お前一体何時からやってたんだよ」
まだ予定時刻にもなっていないというのに、姫月二葉の体操着は泥だらけになっている。

「五時半前には始めてたよ。もう居ても立ってもいられなくなっちゃって、予定よりもずっと早く出てきちゃった」

「居ても立ってもいられなくなっちゃって……お前」

どうしてこいつは草むしりぐらいで、そんな興奮する事が出来るんだろうか。全くもってこいつの考えは分からん。俺にとってはただの苦痛な作業でしかないというのに。

「それじゃあイチも来た事だし、早いとこ終わらせちゃいましょう。あたしの立派な農園を開くために、まずはその第一歩ね」

「まあ……その第一歩がとんでもないくらい高い壁に阻まれてる訳だけどな」

昨日やったのは荒地全体の1割くらいだ。相変わらず姫月二葉は戦力にならなそうだし、実際俺一人で全部やってしまう事に変わりはない。

「……とりあえず、草は俺が取る。姫月は抜いた草を一箇所に集めといてくれ」

俺がそう言うのと姫月二葉は頷いて、昨日から放っておいた雑草の残骸を拾い集める。

まあこいつにはこれくらいが妥当なもんだらう。俺はとりあえず適当に草を抜いて、この作業を中断させるような上手い一言を思いつかねばならない。

ゆっくりと腰を落として、俺は草むしりを始めた。

その横で鼻歌を歌いながら、それはもう楽しそうに雑草を集める
姫月二葉。

本当に不思議な奴だ。普通だったら嫌がりそうな単純な作業なのに、それをまるで遊んでいるかのようにやっているのだから。どうやったらそこまで楽しめるのかと、一言アドバイスを頂きたい程だね……。

まあそんな事を実際聞くわけでもなく、俺は黙々と草むしりを続けた。

やはり腰をかがめて延々と作業し続けるのは大変なもので、始めて二十分くらいで動きが段々鈍くなってくる。いくらやっても雑草はまだまだ残っているし、一体どうしたもんかと俺は手を止めて立ち上がった。

「……なあ、姫月よ。さっきお前立派な農園を開く為、とかどうとか言ってたけど。お前の予定ではこの荒地をどんな風に改造するつもりなんだ？」

俺の言葉に姫月も動きを止める。

「ええと、そうね。あたしの予定だとやっぱりメインは野菜なの。

それと花も色んな所に植えて見た目も良くして、動物も飼って牧場みたいな事もやってみたいかな」

「ぼ、牧場……？ まさか、牛とかそういう方面の事言ってる訳じゃないよな？」

「ええ、その通りよ。毎日その飼ってる牛で乳搾りをするの。その牛乳でアイスクリームとかバターみたいなを作って、想像しただけでも楽しそうでしょ？」

ああ、楽しそうだ。その一場面だけを想像するのならな。

俺は額に手を当ててわざとらしくため息をついてみせた。

「楽しそうだけどさ、いくら何でもそりゃ無理だよ」

色々と思い知らされる。こいつが農業に対する知識をこれっぽちも持っていない事を。野菜や花ならまだ許容範囲かもしれないが、こんな場所で家畜を育てるなんて土台無理な話だ。辺りに新築住居が立ち並ぶような場所で家畜を飼えば、家畜の糞尿やらの臭いで周りに苦情が来るのは目に見えてる。

今のところ畑をほったらかしにしている、近隣の人間から苦情が出てないだけでも奇跡だつて言えるのに、それ以上の事をされたらたまったものじゃない。

それに家畜を飼うだなんて簡単に言ってくれるが、野菜や花なんかとは比べ物にならないくらい大変なんだ。いくら何でもそれだけは不可能だ。

「とにかく牛とか豚とか鶏とか、そういうのは全面的に却下。やるならせめてウサギとか適当にそこら辺にしとけ」

まあウサギなんて農業には全く関係のないもので、家畜としてウサギの肉を食う奴なんて存在しない。だから、姫月二葉を諦めさせる為にそう言っただつてもりだつたのだが

「 良いわね、ウサギ！ すごく可愛いしウサギだつたらあたしにも出来そう！」

そんな事を満面の笑みを浮かべながら言うもんだから、しまった……言い方を間違えたと後悔しても既に遅かった。姫月二葉はこの草取りが終わったら何処にウサギを飼おうかなんて事を考え始めたようだった。

「……はあ」

こいつを諦めさせるどころか、むしろやる気が出るような事を言ってしまうなんて、本当に俺はセンスがない。もっとキツく言ってる方が言いんだらうか？ 姫月二葉が怒り出してしまっくらいめちやくちやに言ってる……後味は悪いかもしれないが、いつその事そっちの方がいいのでは

「どうしたの？ さっきからため息ばかりついて。もしかしてお腹でも空いた？」

姫月二葉がうな垂れる俺の顔を覗き込んでいた。

相変わらず顔が近い、そりゃもう、鼻と鼻がぶつかりそうになるくらい近かった。

俺は咄嗟に彼女から離れようとした。しかし

「……おわっ！！」

俺は何か足に足を躓き、体勢を保てず前のめりに倒れこんでしまった。

「……っ痛 いけど、何だこれ……」

柔らかい何かがむにゆり、と俺の体に押し当たる。俺はでその何かを確かめるように右手で掴んだ。丸っこくてむにむにしていて心地いい。荒地にこんな柔らかい物なんて落ちていなかったはずだし、一体何なのか思いつく事さえ出来ない。

俺はゆっくりと、その何かを確かめるように瞼を開いた。

「……あれ？」

目を開くと目の前には姫月二葉の姿があった。

どうやら俺が前のめりに倒れたせいで、彼女を巻き込んだ形になっただけらしい。

そして俺はようやく気が付いた。俺が掴んでいるその柔らかい何か、それは

「お、おっぱい？」

もう一度確かめるように手を動かす。それは確かに姫月二葉の胸だった。

多分、今の状況を客観的に見れば、俺がちょうど彼女を押し倒したように、朝から一体どれだけ盛ってんだお前らと言われんばかりの状況なのだろう。ていうか何を冷静に解説してんだって俺！！やばいでしょ、押し倒して胸を揉むとかこれ完全にアウトでしょ！？俺は直ぐ様彼女の胸から手を離し、両手を合わせ必死に謝った。

「ごめん！ これは不可抗力であって……別に悪気があった訳だとか、やましい気持ちがあったのではなくて、その、なんて言うか……とにかくごめん！！」

姫月二葉は俺と顔を合わせないように横を向きながら声を張り上げる。

「い、良いから早くどいてよ！ いつまで乗ってんのよ、このバカっ」

俺はその言葉で立ち上がり、二歩三歩と後ろに下がった。

それに続いて彼女も立ち上がるが、顔を真っ赤にして目も合わせたくない。

「突然倒れちゃって本当にスマン。ケガとか……してないか？」

彼女は背中についた泥を手で払いながら、小さくため息をついた。

「ケガなんてしてないし、この変態スケベ」

「はい……本当にすみません……」

こうやって謝りながらも、俺は同じシチュエーションに巡り合えないかと淡い期待を抱いていた。胸の方も着痩せしているのか知らないが、見た目以上に大きくて柔らかくて……それに姫月二葉が頬を真っ赤に染める姿は何だか新鮮で、少しだけ可愛らしいとも思えてしまう。

「何謝りながらニヤニヤしてるのよ。ムツツリスケベ」

姫月二葉から鋭くて痛い視線が飛んできたので、俺は直ぐ様本能に理性という蓋をする。

「まあほら、もうコケないように気をつけるさ。さつきはケガしなくて済んだけど、次は何処かケガしちゃうかもしれないしな、うん」
「……どうだか。はあ、少しだけ休憩しましよ。おっきな声出したら疲れちゃった」

姫月二葉は道路側に置いてあるカバンの方に向かって近付き、そこにゆっくりと腰をおろす。

「ところで、イチ。キミって今朝ご飯食べてきた？」

「ん？ そういや朝飯食って来なかったな」

妹と話してる事に気を取られ、そんな事すっかり忘れていた。

朝っぱらからの草むしりで腹は空いているし、かと言って朝飯になるような物も持ってきていない。

「その様子じゃ何にも準備してこなかったみたいね」

姫月二葉は言いながらカバンの中に手を入れて、ガサゴソと何かを探し始める。

そして中から出てきたのは弁当箱だった。中には色とりどりのおにぎりが所狭しと並べられており、見た限りでは女の子が一人で食べるには多すぎるようにも思える。

「お前、わざわざ俺の分まで作ってくれたのか？」

俺がそう言うとは何故だか姫月二葉はまた頬を紅く染めて、

「ち、違っわよ！ 単にはりきり過ぎてたくさん作っちゃっただけで……って、何でまたニヤニヤしてるのよ!？」

だってもうニヤニヤせざるを得ないだろ、コレ。

どう考えたって今の台詞は言い訳で、俺の為に朝ご飯を作ってくれたとは思えない。

「も、もう！ いいわよ、全部あたし一人で食べるから」

「あゝ！ 待て待て、ちゃんとありがたく頂くから。そう変に心配するなっつて」

俺は弁当の中のおにぎりに手を伸ばす。

「んじゃ、いただきます」

ぱくり、と一口。

見た目通り美味しくて、空きっ腹には最高の朝ご飯だった。

握る強さも丁度よく、お米がふわふわとしていて食べやすい。

「……」

姫月二葉は俺がおにぎりを食べ終わるのをじっと見つめていて、見るからに俺の感想を待っているようだった。

何だか本当に可愛らしい。ていうか、昨日の不機嫌そうな雰囲気は一体全体何処に行ってしまったんだろうか。学校にいる時は常に冷たい視線で俺を見ていたはずなのに、こうして二人でいる時は何だか照れてるような様子に見える。

「……ど、どつっ？」

感想が待ちきれなかったのか、姫月二葉は沈黙を破って口を開く。俺は口の中をモゴモゴしながらおにぎりを飲み込んで、

「うん、最高に上手いよ。料理のセンスはあるかもな、姫月って」

俺のその言葉で姫月二葉は花が咲いたみたいに笑顔を見せたが、また頬を紅くして顔を俺とは反対側へと向ける。

「そ、そう。それなら良かったわ」

ただそう一言だけ呟き、弁当箱の中のおにぎりに手を伸ばした。そして彼女は荒地の方を見つめながら黙々とおにぎりを食べ始める。それにしても本当に美味しいおにぎりだ。一体何処の銘柄の米を使ってるのか気になってしまうのは、やはり俺の体の中に農家の血が流れているからなのだろうか？

気付けば弁当箱の中は空っぽで、姫月二葉が持ってきてくれたおにぎりの八割くらいは俺が食べてしまっていた。

「そんなにお腹へつてたの？」

「ま、まあな。腹は減ってたし、さっきの草むしりで少し疲れてたしな。うん」

「ともかく満足してもらえたみたいで良かったわ」

彼女は弁当箱をカバンの中に入れて立ち上がり、体を大きく伸ばした。

「キミのお腹もいっぱいになったところだし、さっきの続きをやりましょ。早く草を取りきらなきゃ次のステップには行けないものね」
「次のステップ……か」

その言葉でようやく思い出す。

俺のそもそもの目的は姫月二葉の暴走を止める事であって、こつやって美味しいおにぎりを二人で食べる事じゃない。次のステップに行かれるよりも早くこんな事は終わらせなくてはいけない。

それでも、いくらそう思っても

何故だか俺は、楽しそうに雑草を集める彼女を止める事が出来なかった。小さな頃の父の背目掛けて育っていた俺を見ているようで、真っ直ぐに農業を見つめる彼女の姿が眩しくて……何も言い出す事が出来なかった。

「どうしたの？ そんな所でポーっと突っ立って」

「え……？ い、いや、何にもねえよ。そうだな、さっさと草むしり終わらせるか」

俺は姫月の隣で腰を落とし、空に向かって伸びる雑草へ手を伸ばした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3534ba/>

Sunny Day Love Farm 『ツンデレ少女と農業をやるハメになった！？』

2012年1月9日05時00分発行